

未来の名馬を目指して ばん馬を育てる生産者

一頭の子馬が生まれ、競走馬としてデビューするまでには、多くの時間と人の手を要します。生産者のもとで大切に育てられたばん馬は、馬主に見出されて競走馬の道へ。そして二歳の春、勝負の世界に飛び込んでいきます。



5月、母馬とともに草地を歩く生後2週間の子馬。

わば馬の戸籍です。その後、子馬は、種つけを終えた母馬とともに、六月から十月頃まで放牧されます。秋が深まると、子別れの季節。母馬は次の出産に備えるため、子馬は体をつくるため、別々に飼育されることになります。

生まれた時は六十〜百キロほどだった子馬の体重は、再び春を迎えて一歳になると、六〜七キロ口に。この頃になると、そろそろ買い手がつき始めます。よく育った体格のいい馬は、地域で開催される共進会（家畜品評会）に出すことも。ここで良い評価を受ければ、生産者の励みになりますし、その場で馬主が決まることもあります。

馬主が決まった馬は、十一月か

ら十二月頃には、故郷を後にして帯広競馬場のきゆう舎に入ることになります。種つけをしてからここまで約二年半。生産者が手塩にかけて育てた馬は、先人から受け継いだ高い馬産技術と地道な努力の結晶です。

生産者の減少に歯止めを

帯広市単独開催が始まった平成十九年、道内のばん馬の生産頭数は一九〇〇頭ほどでした。それが平成二十六年には、約一一〇〇頭となり、減少の一途をたどっています。背景には、生産者の高齢化に伴う離農や後継者不足、経済的理由など、さまざまな要因が指摘されています。

ばんえい競馬の安定した運営のためには、競走馬の確保が欠かせません。そのため帯広市は、平成二十七年に「帯広市生産者賞」を創設。三〜五歳馬の特別・重賞競走の年間三十レースを対象として、特別競走は二着まで、重賞競走は三着までに入った馬の生産者に賞金を支給し、生産者の意欲増進に努めています。

取材協力／有限会社帯広ファーム



育成中の1歳馬。良い飼料を与え、健康管理に気を配りながら大切に育てていく。

馬産地を支えるばんえい競馬

四月、ばん馬の生産牧場では、馬の出産がピークを迎えます。まだ細くて長い足を踏ん張り、母馬のお乳を求める子馬たち。この子馬たちの中から、明日のトップホースが育っていくのです。

全国の農用馬（ばん馬）頭数のうち、約九割を占めるのが北海道。生産牧場は、十勝、釧路、根室をはじめ、道内各所に点在しています。その多くは、馬が人々の暮らしに欠かせなかった時代から、代々馬産に携わってきた家族経営の牧場です。

かつて農耕や運搬の担い手として需要の高かったばん馬も、今ではその用途が限られるようになりました。そんな中、ばんえい競走馬として羽ばたける馬を一頭でも多く生み出すことが、生産者たちの生産意欲を支えています。

子馬の誕生から旅立ちまで

馬の妊娠期間は、約三三〇日。実に一年近くかけて一頭の子を産みます。生産者は何よりもまず子馬が無事に誕生することを願い、愛情を注いで育てます。馬の出産



5月頃まで続く出産ラッシュ。子馬たちは秋まで母馬とともに過ごす。



は早ければ一月から始まり、五月頃まで続きます。出産を終えた牝馬には、子宮の回復を待って、次の種つけを行います。強いばんえい競走馬を生むために、「ニック（優秀な馬を生み出す血統の組み合わせ）」を考えるのも、生産者の重要な仕事。出産と種つけが相次ぐ春は、生産牧場が最も多忙を極める季節です。

子馬が生まれると、まず行うのが血統登録。馬の名前や毛色、特徴などを届け出る血統登録は、い



帯広家畜共進会で審査を待つ1歳馬。